

「古銭軍曹」

日露戦争に出征し「奉天の会戦」(明治三十八年)で生き残られたであろう兵士が、戦地で記念の文字を書き込んだ日露の軍票を前号で紹介しました。



写真①

英山、22歳と81歳の合成写真

22歳の英山の眼の前には、段重ねの箱、小箱や畳紙に入れられた古銭を並べ、左手の書籍に見入り、右手にはピンセットのようなつまみを持ち、蒐集品の山の中に身を置いて、莞爾と微笑みを漏らしているのではないのでしょうか。

この時の階級はどの辺りだったのでしょうか、少々俯き加減で、肋骨の軍服姿で胡坐をかく右側には、四角の火鉢の上に鉄瓶が掛けられ、その横には、蜜柑か何かの食べ物丸盆に載せられ、畳ではなく絨毯が敷かれた部屋での撮影です。

提示した写真は、昭和33年、81歳の自身の顔を左上に配した合成写真を三重県亀山市で作ったようです。

有名だったらしく、その所作も際立ったのか、彼には何時しか一つの名前が与えられたのです。人呼んで「古銭軍曹」。

ここに二十二歳の軍服姿の佐野を映した一枚の写真が残されていますが、なにかしら趣味家の雰囲気があるように漂っているように感じられます(写真①)。

「古銭趣味と軍人」。何とも似つかわしくはないようですが、下級兵士など虫けらのように扱い、その尊厳など顧みる余裕などなくなった支那事変以降の昭和の軍隊に較べれば、個人の趣味嗜好を問題とはせず、明治時代の軍隊内にはおらかな気風があったのでしょうか。

古銭軍曹は日露の戦役に出征しましたが、以降の佐野の活躍をみれば、理性を亡くするような場面も多かったはずの戦場を転戦したでしょうが、古銭に親しむことができた気持ちの余裕が、精神の安寧に寄与していたのではないのでしょうか。

無事帰国して除隊、その後は大阪造幣局にその職を求め、後年、転じて貨幣を商う道を選んで泉號を「蝶葉堂」、名を「英山」と名乗るようになりす。

日露戦後も永く古銭軍曹の名が付いて廻ったようで、佐野自身も敢えて取り消さず、それを自身のプロフィール、宣伝にも用いることもあったようです。古銭蒐集界においては、古銭軍曹・佐野英山の残した功績は計り知れないものがあり、手許に幾つかの資料がありますからその一端をここで紹介させていただきます。

佐野英山は伊賀の出身で、造幣局奉職時には圓圓堂・甲賀宣政(造幣局技師、試金部長兼試験場長、正四位勲二等、工学博士、古銭蒐集家でもあった)の薫陶を得ており、業者の道に進んでもその師弟関係は変わらなかつたのです。

取集界における英山の数々の功績は、造幣局時代から顕著に発揮されていたようで、書籍刊行の素地などもその頃に作られていたらしく、後に泉界を導く幾つかの錢書を残していますが、それを語るとき次の二書は忘れてはなりません。

その一が『鑄貨圖録』乾・坤(写真②)。

乾の(錢座部)、坤の(金、銀座部)の二部構成で、大正二年十二月に発行されています。江戸期の職人など